

中京大学付属図書館蔵『狭衣物語』（承応三年刊）の書き入れ

中 城 さと子

表紙は一見無地に見えるが、紺地に銀の草花等の模様のほとんど剝落したものであり、もとは美麗なものであつたろう。また刷りも初刷り（谷岡七左衛門板行）ではないものの、後刷りのなかでは早期の田中理兵衛板行のものである。本書は、幕末のころに石川依平（寛政三（二七九一）〜安政六（二八五九）年）の蔵書となった。彼の号に「檀が本」とともに「柳園」があり、『狭衣目録^并年序』『下紐』『狭衣系圖』を含めた全一六冊の巻頭に「柳園書室」の朱印（縦36^ミ×横23^ミ）、巻末に「依平蔵書」の朱印（縦31^ミ×横23^ミ、写真参照）がある。依平は、幼少より歌を読み神童の誉れ高く、九歳で冷泉為章に入門、歌人としての名声は江戸にまで聞こえたという。一七歳で栗田土満に入門、二三歳で本居春庭にも入門、また伴信友とも親交し問学している。⁽¹⁾



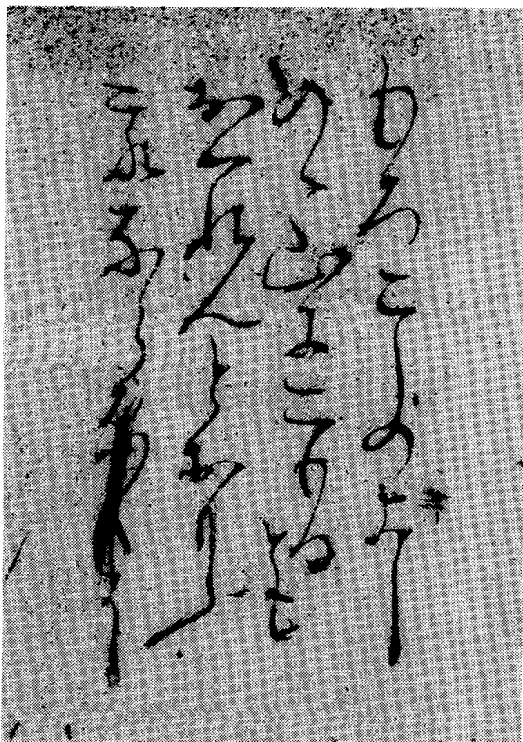
ところで、『狭衣物語』（題簽に記す物語名は「さころも」）の巻第一之上・巻第一之下・巻第二之上の匡郭外上部、および巻第一之上の表見返しには、一筆の書き入れが存在する。朱・墨の二色があるが、朱墨の使用に規則性は見いだせない。書き入れ者は、蔵書印から石川依平の可能性が高く、まず筆跡の鑑定を試みる。なお認定資料として、『思文閣古今名家筆跡短冊目録』（平成3・3）⁽²⁾に所載されている依平の短冊写真を用いる。

さて、巻一之上の表見返しの物語歌および2ウ・6ウ・25ウ・35ウ・43ウ・巻二之上12オの書き入れに特徴ある運筆の平仮名「れ」が見られるが、これと同様の運筆が『思文閣古今名家筆跡短冊目録』の5222（巻五のNo222）を表す、以下同じ）・七193・一一151・一二

188・二五48(5)・同(8)・二八41(17)の平仮名「れ」に見いだせる。また巻一之上6ウ・27オ・43ウの書き入れには、平仮名「れ」よりもさらに特徴ある運筆の「お」が見いだせ、これと同様の運筆が『思文閣古今名家筆跡短冊目録』の一〇202・一七90・二五48(1)・同(4)・二八41(17)の平仮名「お」に見いだせる。例えば巻一之上43ウの書き入れ（写真参照）は

もろこしの よし／の、山に こもるとも／おくれ
んとおもふ／我ならなくに（傍線部に紙のゴミ。

「／」で改行を示す）



とあるが、傍点部の「れ」「お」の運筆が、短冊写真と一致する。

以上のように、平仮名の「れ」と「お」の運筆が『思文閣古今名家筆跡短冊目録』所載の石川依平筆短冊に存在すること、さらに全体的印象も一致することにより、中京大学付属図書館蔵『狭衣物語』（承応三年刊）は石川依平書き入れ本と認定される。

次に書き入れを検討する。次表は、巻第一之上の表見返しにある書き入れである。なお、〈 〉内は割り注・傍注を、《 》内は朱書きを表す。また傍線で消去線の代用をする。

番号	書き入れ本文（ただし③の「二ノ巻大宮」は左注）	行数
①	一卷〈上／下〉 三月より九月までの事あり 〈十八歳／二位中将〉	1
②	一条院 《〈當帝〉》 嵯峨院 後一條院 今上	2
③	先帝 堀川大臣上 〈二ノ巻大宮〉 — さ衣 式部卿宮 — 源氏宮 《〈太政大臣女一条女院妹〉 東院上》 《〈坊門上〈中宮ノ母〉》 《〈北方〈さ衣ノ母〉》	3 4 5 6 7 8 9
④	狭衣稱号は 色々にかさねてはきし人しれす思ひそめてしよ半の さころも	10 11 12 13

①は、巻一で物語られる期間と主人公狭衣の年齢と官位を記している。①の「三月より九月までの事あり」の書き入れと全く同じ本文が、次に示す全一六冊の初冊『狭衣目録^并年序』の傍線部aに存在することから推察して、依平は、『狭衣物語』を読むに先立って、全一六冊の初冊『狭衣目録^并年序』に目をとおしたのである。ただし、とりあえず読んだのは、巻一に関する部分（1オ―2オ）と最終丁のあたりのみではなかったか。1オ―2オおよび最終丁に次の記事があり、①は傍線部a e f g hから記すことが可能である。

* 一 狭衣の年序は 一^aのまきは三月より九月までの事あり 二^aまき 同しき年の冬より書そめて 二ヶ年の春を経て 八月に嵯峨院おりゐさせ給ふへきあらましの時に 一^bのまきにて位につかせ給ひてより治世二十年とあり 此時後一条ノ院に位をゆつり給ふて（中略）^d四巻の帝は今上也（後略）（最終丁オ）

* 〈初年〉^e／三月さ衣大将 藤花一枝おりて 源氏宮へもてまいり給ふ事／○堀川の関白殿の殿作り 北方三人すみ給ふ事／○さ衣十八才^f 兒儀能藝たぐひなき事（後略）（1オ）

* 九月^g 狭衣 いま迄は二位中将なるが中納言になりたまふ（2オ）

②は物語での皇位継承の順序である。前掲の『狭衣目録^并年序』の傍線部b c dからも②を書くための予備知識を得られるが、ここからは「一条院」の名が出てこない。『狭衣物語』の巻一之上の読みを開始してすぐに

春宮〈一条院皇子也〉のさかりにはかならずみせよとのたまはする物を（1ウ）とあり、またその先に

堀川のおとゝと聞えて関白し給ふは 一条院 當帝〈嵯峨院と系圖にあり〉などのひとつ后ばらの二の御子ぞかし（3ウ）

と出てくるので、ここまで読み進めば『狭衣目録^并年序』の傍線部b c dを参照して、②を記すことが可能となる。

③は巻一之下の1才までを読むことにより知られる主要人物の系譜を書いたものである。ただし『狭衣物語』では、源氏宮は「故先帝の御すゑの世に」(一之上8ウ)生まれたと、堀川上は「故先帝の御いもうと」(一之上4才)と紹介されるが式部卿宮を先帝に結び付けるものは語られていないので、物語の記事からは系譜は「図1」のようになる。なお実隆作の『狭衣系圖』では式部卿宮を先帝の息としており、系譜は「図2」になっている。この『狭衣系圖』の式部卿宮を先帝の息とする享受は、『下紐』にも受け継がれ、

A 一 坊門 先帝の御子式部卿宮の御むすめ也(一5才)

と解説されている。またこれを切臨も受入れ、次の版本の源氏宮への傍注において、式部卿宮を先帝の息としている。

B つれくにおぼさるゝまゝに さるべからん人のむすめもがな あづかりてかし

づきたてんなど 明暮さるはうらやみ給ふめる 源氏宮(先帝ノ御子式部卿宮ノ妹也)の御かたち かくすくれ給へる御名たかくて 春宮のいとゆかしう(一之上9ウ)

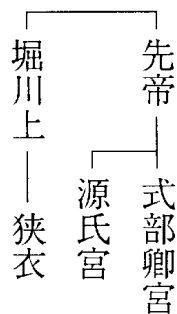
ところで依平は、Bの源氏宮への傍注「妹」を「娘」と読み違えたらしく、この読み違

えた傍注に拠って「先帝——式部卿宮——源氏宮」の系譜を書いたと推察される。堀川上は「故先帝の御いもうと」(一之上4才)と紹介されたが、堀川上のことを「は、宮」(同5才)と言い換えた箇所では、切臨は「先帝の妹」と傍注している。ここでも依平は「先帝の娘」と誤読したのであろう、狭衣母堀川上の系譜を「先帝——堀川大臣上——さ衣」と記したのである。しかしこの系譜を認めた後、付帯の『狭衣系圖』を参照した折にでも自身の書き入れを間違いと判断したのであろう、結局は消去線を施している。

〔図1〕



〔図2〕



④は物語名「さころも」のよった物語歌を記しており、第四句までは本書（版本）と一致した表記であるが、第五句のみは本書の「夜は」の表記が「よ半」となっている。また本書に付された濁点を取り去られ、清音に戻して表記している。これら①～④の書き入れは、『狭衣物語』の卷一上下を読むに際して記されたものである。

次に、匡郭外上方にある書き入れを次表に示す。これらは『下紐』を参照して記されたものであり、⑦⑧⑫が物語人物についてであり、他は引歌である。

番号	匡郭外上方の書き入れ（表記記号は前表等と同じ）	本文箇所	下紐
⑤	《夏にこそ咲か、り／けれ藤花松にと／のみもおもひける哉》	一上1才	一3ウ
⑥	第三／谷ふかみたつをたまきは／我なれやおもふ心の朽て／やみぬる	同2ウ	一4ウ
⑦	御門へ一条院にはあるへからす／嵯峨院也	同3才	一5才
⑧	《太政大臣／後一条院御祖父也》	同4才	一5才
⑨	秋の夜の千よを一よに／なせりとも詞残りて／鳥や鳴なん	同6ウ	一6才
⑩	しほみては入ぬる磯の草／なれやみらくすくなく／こふらくのおほき	同6ウ	一6才
⑪	年をふるなみたかいかに／あふことはなを／いなふちの瀧まされとや	同7才	一6才
⑫	《中宮／御母坊門上》	同14ウ	一10才
⑬	《むさしの、むかひの／岡の草なれは／根をたつねても／あはんとぞ思ふ》	同25ウ	一14才

②②	②①	②⑦	①⑨	①⑧	①⑦	①⑥	①⑤	①④
《夏之夜をねぬに／明ぬといひをきし／人は物をやおもは／さりけん》	《けさきなきいまた旅／なるほと、きす花／たちはなにやとや／からなん》	《よしの河岩きり／とをし行水の／音にはたてし／恋はしぬとも》	《年をふる涙かいかに／あふ事は猶いな／ふちの瀧まされとや》	《東路の道のはて／なるひたち帯のか／ことはかりはあはんと／そ思ふ》	《もろこしのよし／の、山にこもるとも／おくれんとおもふ／我ならなくに》	《みつね家集に／草／も吹はらひ／ぬる木からしに咲／こそまされ物おも／ひの花》	《みかりするかたの、みの、／ならしはのなれはま／さうてこひそまされる》	《君にあはんその日は／いつと松の木の苔の／みたれて物をこそ思へ》
同	同	二上	同	同	同	同	同	同
12才	4才	1才	43ウ	36才	35ウ	31ウ	27ウ	27才
二5ウ	二2才	二1才	一24才	一19才	一18ウ	一16ウ	一15ウ	一14ウ

これら⑤⑦②②の書き入れの内の⑦「御門（一条院にはあるへからす）嵯峨院也」を検討する。この⑦の書き入れは、切臨が版本に付した傍注のうち、次の本文Cにある最初の傍注を批判したものである。

C た、二葉より露ばかりへたつる事なくおひたち給ひて おやたちをはじめたてまつり よその人々 御門

（一條院） 東宮（後一條院）もひとついもせ（兄弟といふ心也）とおほしめしをきたるに（一之上3才）

切臨は、『下紐』を参照して付注しているので、まず、傍注に關係のありそうな『下紐』の箇条を掲出する。なお切臨が参照した『下紐』は、類従本的一本と昌叱注の加筆本と考えられているが、類従本一本に近いと考えられる尚嗣本・蓬左文庫本、および昌叱注の加筆本としての寛佐本は、c d eの三箇条とも版本と同文（ただし表記を無視する。なおeは三本とも「春宮は」の「は」はない）であり、切臨の披見本文は次に示す版本と同文と考えてよい。

c 一 さるはそのけふり おもひをあらはさんをもよひなきにはあらて 二葉より姉妹兄弟のごとくにしてといふ心也 當時は夫婦を妹背といへり(一四ウ)(寛佐本5オ・尚嗣本4ウ・蓬左文庫本3ウ)

d 一 今上 さがの院の一の宮春宮也 坊門の上の御孫也(一五オ)(寛佐本5ウ・尚嗣本5オ・蓬左文庫本4オ)

e 一 春宮は後一条院 内と申は一条院也(一七ウ)(寛佐本8ウ・尚嗣本7オ・蓬左文庫本5ウ)

切臨は、物語本文Cへの三つの傍注を付けるために、Cに該当する『下紐』の箇条cからは「兄弟といふ心也」の傍注のみを付し、eから「一条院」「後一條院」の傍注を付したと知られる。切臨は、Cの帝に、eの当該物語本文Eでの帝と同じ「一条院」の付注をしているのである。

E 春宮のいとゆかしう思ひ聞えさせ給へるに さこそはつゐの事ならめとおぼしたり 内のうへもむかしの御ゆいごんおぼしわすれずあはれにきこえかはさせ給ひながら おぼつかなくて過させ給ふも口おしきを さやうにて内ずみもせさせ給へかし とおとゝにも聞えおどろかせ給ひけり(一之上10オ)

次に『下紐』の箇条dの当該物語本文Dを見てみる。

D このころ中宮と聞えさす 今上一宮さへ出おはしましける(一之上4ウ)

『下紐』は、解説する対象を掲げて標目とする場合と、解説する箇所を指し示すためその箇所のはじめの本文を抜き書きして標目とする場合があるが、dの場合は後者で、「今上一宮」についての解説と推察する。紹巴は、今上すなわち当代の帝は嵯峨院と考え「今上一宮」は「さがの院の一の宮春宮也…」としているのである。すなわち紹巴は、Dの場面での帝は「嵯峨院」と考えている。なお切臨もDの場面での帝を「嵯峨院」と考えていることは、既に取り上げた箇所

堀川のおと、と聞えて関白し給ふは 一条院 當帝（嵯峨院と系圖にあり）などのひとつ后ばらの二の御子ぞかし（一之上3ウ）

の傍注によって明らかである。

紹巴が、Dでは當帝を嵯峨院と考えているにもかかわらず、Cの「御門」・Eの「内のうへ」を「一条院」と考るのは、後一条院の結婚に関して発言権のある父親こそが、Cの「御門」・Eの「内のうへ」に該当すると考えたからであろう。これを切臨も受け入れているのである。

しかし、この紹巴の考えは受入れにくいものであったらしく、初稿本『下紐』成立（天正一八〔一五九〇〕年）の三年後に書かれた『狭衣文談』でも

うちのうへも（一条院也と下紐にあり） 私 内と申すは嵯峨院也 下紐あやまり也（一上24ウ）

と、批判されている。⁽⁷⁾なお清水浜臣（安永五〔一七七六〕文政七〔一八二四〕年）は、「内のうへ」を「一條皇太后」（『狭衣物語古注釈大成』二七頁）としている。

このように、「源氏宮」の春宮への御参りを勧める人物「内のうへ」については論が分かれ、享受の面で興味深い、依平は「嵯峨院」であると考え、「一条院」説を批判しているのである。なお、この依平の指摘は妥当なものといえよう。

次に本文への書き入れをみる。次表では、⁽²⁸⁾⁽³⁰⁾に朱の傍点が、それら以外の波線部の本文の横に朱の傍書が付されている。

本文箇所	書き入れ	下紐の解説・その他	下紐
<p>②③ 一上1ウ⑥</p> <p>②④ 一上2ウ⑦</p> <p>②⑤ 一上3ウ⑤</p> <p>②⑥ 一上27ウ⑨</p> <p>②⑦ 一上37才⑦</p>	<p>しな〈級〉ひ</p> <p>もやの〈草子地〉はしらに…</p> <p>今は〈草子地〉じめたる…</p> <p>身色〈法花序品〉如今山…</p> <p>あされ〈左礼〉たり</p>	<p>一藤のしなひ 級字也 (下略)</p> <p>一もやのはしらにより (中略) 草子の地なるへし</p> <p>一いまはじめ 是より双紙地也 けれどもなるべし</p> <p>一身色如今山 端巖甚微妙〈法花序品〉 (下略)</p> <p>(『下紐』の解説なし)</p>	<p>一4才</p> <p>一4ウ</p> <p>一5才</p> <p>一15ウ</p> <p>／</p>
<p>②⑧ 一下12ウ⑨</p> <p>②⑨ 一下20才⑥</p> <p>③⑩ 一下31ウ⑤</p>	<p>いぬもとき (傍点)</p> <p>いとな、〈とこ〉ろせきまで</p> <p>いひあだへ (傍 傍点) つ、</p>	<p>一犬もとき</p> <p>(本文を訂正)</p> <p>一あたへて ひそまぬ心也 源氏にあり</p>	<p>一37才</p> <p>／</p> <p>一48ウ</p>
<p>③① 二上1ウ②</p> <p>③② 二上1ウ⑩</p> <p>③③ 二上44才⑦</p>	<p>わすれかたふ (ミ) 〈う〉</p> <p>つ 〈つ〉くし</p> <p>人げ 〈け〉なる</p>	<p>(仮名遣いの誤りの訂正)</p> <p>(読みにくい字体「つ」に「つ」と傍書)</p> <p>(「を」に似ているので「け」と傍書)</p>	<p>／</p> <p>／</p> <p>／</p>

これらの本文への書き入れのうち巻第一之上下のものは、②⑦は意味(「左礼(ざれ)」すなわち「戯」)を示したも

のであり、②⑨は版本の間違いを正したものであるが、これ以外は『下紐』を参照して書き入れられたものである。そして巻二に関しては、巻二之上の三箇所に書き入れが見られるのみで、③①は仮名遣いの誤りを正したものであり、③②③③は版本の読み誤る可能性のある字体に仮名を付したものである。依平が『下紐』を参照しながら書き入れを行ったのは、二つの表から分かるとおり巻一上下までであり、読んだ形跡が書き入れとして残されているのは巻第二之上までである。

また巻第一之上1オ―6オにのみ不審紙が存在するが、不審紙も依平の貼付とすれば、⁽⁸⁾『狭衣物語』を読みはじめた際には、非常に細かく読み始めたことになる。しかし、それも巻第一之上の六丁までで、以後には不審紙を付けていない。なお不審紙の貼付されているのは、冒頭部および狭衣および狭衣一家の紹介記事であり、物語の導入部にあたる。この導入部で、細かく『下紐』を参照した形跡を留めているが、先へ進むにつれ『下紐』を参照した形跡が少なくなり、ついには巻第二之上の途中からは『下紐』を参照した形跡を留めていない。巻三・四を読む際には『下紐』を参照しても書き入れを省略したのであるのか。それとも『下紐』を参照しなかったのか。あるいは『狭衣物語』を読むのを途中で止めてしまったのであろうか。

以上、中京大学蔵の石川依平手沢本『狭衣物語』（承応三年刊 十六冊）のうち、巻一之上・巻一之下・巻二之上の三冊は石川依平の書き入れ本であり、それらの書き入れの大部は、『狭衣物語』本文の他に、『狭衣物語』^并年序『下紐』および『狭衣系圖』を参照して付されていることを明らかにした。江戸末期の『狭衣物語』の享受の一例としての依平の場合も、版本付帯の『狭衣物語』^并年序『下紐』『狭衣系圖』が参照されており、『狭衣物語』^并年序にはたした版本の力が大きかったことが分かる。しかし、依平自身の納得のいかない点については一箇所のみでは

あるが『下紐』を批判している。『下紐』等に導かれ読んではいるが、無批判に受け入れる態度ではなく、確認しながら読んでいるのである。しかしいかなる事情によるのであろうか、巻第三之上以下の書き入れが見られない。

注

(1) 『和歌大辞典』（明治書院、昭61）による。

(2) 目録は刊行中であり、巻一―巻二九を参照した。

(3) 関根慶子氏「狭衣物語人物考——系図をめぐって——」（『文学・語学』38号、昭40）で論じられている。

(4) 中田剛直氏「狭衣下紐諸本考」（『永山勇博士退官記念会国語国文学論集』風間書房、昭49）二六〇頁。

(5) 拙稿「昌叱註より観た狭衣註釈書『下紐』諸本」（『解釈学』第十二輯、平6・11）で、中田剛直氏の言われる類従本的一本とは、陽明文庫蔵「尚嗣本」・蓬左文庫蔵本に近いものと論じている。

(6) 寛佐本については、中田氏前掲論文および前掲の拙稿で論じている。

(7) この『下紐』注の紹巴の真意および『狭衣文談』の批判については、拙稿「近世初期における『狭衣物語』享受——近衛尚嗣を中心にして——」（『論集源氏物語とその前後4』新典社、平5）の注24で触れたことがある。
(8) 不審紙一覧を次頁にあげる。ただし不審紙箇所としてあげた本文は位置関係を示すものであり、不審紙の当該本文とは限らない。

⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	箋行数	不審紙箇所（傍線部との位置）
5 才 10	5 才 10	4 ウ 6	4 ウ 1	4 才 2	3 ウ 7	3 才 11	3 才 7	2 ウ 10	2 ウ 6	1 ウ 11	1 ウ 7	1 ウ 4	1 才 9		
いま（下）くしきまで	あえか（重）に	中宮と聞えさす（重）今上一宮	世の覚（重）えもうちくの	かたじ（重）けなき	御せ（左）うとならさんおとこ	けし（右）からずもあるべきかな	おもはずなる（中間）心の	心ぐるしきや（左）さるはこの	たつ（左）をたまきの	いみじきや（左）	まほら（右）れ給ふに花こそ花の	見をこせ給へる（右下）	て	さぶらひわらはのおかしけるし（重）	

⑲	⑱	⑰	⑯	⑮
6 才 11	6 才 5	6 才 4	6 才 3	5 ウ 8
おほろけ（右）ならさらむ	たかへせい（重）し聞え給ふべき	すこしにてもも（左下）くるしく	哀げ（左）也	あり（重）ぐるしく